

むすびを食べた地藏様・鹿足郡吉賀町注連川 令和3年1月26日

収録・解説・酒井 董美<sup>たむよ</sup> イラスト・福本 隆男



[https://kanbenosato.com/min/wa/kancho\\_20180702.html](https://kanbenosato.com/min/wa/kancho_20180702.html)

語り手 小野寺賀智さん  
(明治23年生まれ)  
収録・昭和39年(月日不詳)

あらすじ

あるところにねえ、お母さんが死んで、また後のお母さんをもりましたそうな。六つぐらいな男の子に、後のお母さんはお父さんの留守には、ご飯を全然食べさせようとしません。子がよそへ行つても、その家で、「はあ、いにんさいよ。ご飯じやからね」と言うので、その子がもどつて、「お母さん、ご飯を食べさせて」と頼んでも、「今ごろご飯を食べるバカはおらん。遊びに出んさい」と追い出すそうです。いつもお父さんの留守にはご飯を食べさせません。ある日、その子がまた同じことを言つてもどつて来たので、「そねえにご飯が食べたけりやあ、あんな下の地藏さまへ、このムスビよう持つちつてあげて、地藏さまが食べんさつたら、おまえにも食べさせようが、そうでないとご飯を食べさせん」とお母さんが言いました。

すると、その子は喜んでそのムスビを地藏さんに持つて行つて、お地藏さまに向かつて、「地藏さま。どうぞこのおムスビを食べてください。こりよう食べてくださつたら、わたしもご飯をもううて食べることができますが、そうでないとわたしやあ、いつもお父さんの留守にやあ、ご飯をもうもうて食べません」と泣いて頼んでいましたら、その石のお地藏さまが手を出して、そのおムスビをつかんで、バック食べ始められました。その子は、家へとんで帰り、お母さんに、「やつあれ、お母さん。お地藏さまがムスビを食べんさるから、わたしにも食べさせてくれえ」と言いますと、お母さんは、「バカたりよう言うな。石のお地藏さまがムスビゆう食べんさるうことがあろうか。おまえがそう言うて食べたんじやろう」と言います。しかし、男の子は、「いや、そうじゃあない。来て見んさい。隣のおばさんも来て見んさい。今食べよりんさる」と言います。

このようにその子があまり騒ぐので、連れだつて行つて

見ると、石の地藏さまは頬ぺたにご飯をつけられたりしながら、やつぱりバックバック食べ続けておられる。お母さんはびっくりしました。「わああ、こりやあわしが悪かつた。今までご飯を食べさせないような悪いことをしたが、石の地藏さまがおムスビなんぞを食べんさるうことはないのに、こういう見せしめをわたしにしんさるに違いなあけえ、これからあこの子にご飯を食べさせます」とお詫びを言つて、それからは自分の本当の子のように、その子をかわいがつたということでした。

解説

継子譚に属するこの話は、関敬吾博士の『日本昔話大成』の中には話型登録がされていない。というところはこれは単独伝承型であるということなのであろう。そしてもちろん、わたしのこれまでの収録でも、他に同類の見つからない話なのである。ただ、慈愛溢れる地藏信仰を背景に成立したものであることだけは、これによって分かるのである。(元島根大学法文学部教授)